

暮らしの中の木材

第16回 木を曲げて使う

木材利用部 小林 功

椅子の背もたれや伝統玩具、せいろなど「曲線をデザインに生かした木製品」を目にすることはしばしばあります。現在ではこれら製品の曲線部分は専用の加工機械で木材をカットすることによって美しく仕上げるができます。しかし、このような機械がまだ発明されていなかった時代から、曲線をデザインに生かした木製品は存在しました。これらは「曲げ木」という伝統技法によって作られました。

みなさん、もしお手元に木材があったらちょっと曲げてみてください。少しは曲がるでしょう。ことに薄いものであれば比較的簡単に曲がると思います。しかし、その木材で椅子の背もたれや風呂桶などを作るつもりで曲げると、無理をすれば割れるか、あるいは割れる前に手を離せばほとんど元に戻ってしまうでしょう。このように木材を曲げて使うためには、割らずに大変形させること、変形を固定すること、という二つの技術が必要なのです。そしてこれらの技術は欧州でも日本でもそれぞれの文化に沿った形で発展してきました。

椅子に座るという文化を持つ欧州では、椅子の背もたれやテーブルの足のデザインなどでこの技術が発展しました。19世紀半は、ドイツのMichael Thonetによって開発された「トーネット法」と呼ばれる曲げ木技術がそれです。例えば椅子の背もたれであれば、まずちょうどよい太さにカットした角材を「煮て」柔らかくしておき、曲げる部分の片面だけに金具をつけて固定します。そして金具の面が外側になるようにして曲げると、角材の外側は伸びずに、内側にはしわが寄り、割れずに曲がります。こうして変形させたまま乾燥すれば変形は固定されます。



写真1. ひじ掛けの部分にトーネット法による曲げ木を使ったイスの例

一方、木と紙で家まで作ってしまう文化をもつ日本人は、身の回りの小物の多くを木材で作りました。日本における曲げ細工はかなり古い時代から行われていたようで、一説には奈良時代にまでさかのぼるといわれています。まず木材を薄く剥いで煮ることによって曲げても割れないくらいに十分柔らかくします。そして手でえいやと曲げた後、木材で作った型枠やひもなどを使って固定し、形を保ったまま乾燥します。曲げるときに金具で固定せず、木材をそのまま曲げるところがトーネット法と違うところです。こうして作られた桶やせいろ、ひしゃくなどは「曲げもの」と呼ばれます。

文化的な違いから要求される製品も異なりますから、当然手法も異なる形で発達しましたが、どちらも水と熱によって柔らかくして曲げ、乾燥して固定するという原理は同じです。トーネット法による曲げ木家具は、ドイツで家具メーカーが高級品として生産・輸出しており、また、日本でもこうした家具を製造・販売している家具メーカーがあります。これに対して日本の伝統的な曲げものは、どちらかというと職人芸で、現在に至るまで訓練を積んだ職人の手によって優れた製品が作られています。また、もともと日用品としての需要が多かったのですが、他の代用品に取って代われ、現在では日常生活の中からは姿を消しつつあり、需要は高級料亭などの特殊な用途に集まりつつあるようです。どちらも高級品として扱われているという点では同じですが、その様相は異なり、単なる国の違いだけではなく、生活様式の変化とも関連しながらそれぞれの道を歩んでいます。伝統的な技を技術的な見方で解釈するのもおもしろいですが、こうした技をそれを取り巻く文化の違いから眺めるのもまた興味深いものです。



写真2. 薄く剥いだ木材を曲げているところと、曲げたせいろの材料を乾かしているところ